

高村智恵子著「智恵子紙絵」筑摩書房 1993年12月6日刊を読む

無題録

高村智恵子

いとほしい髪の一すぢより
感情のはげしい瞬刻の閃光まで
私にとっては宝玉だ
抜きさしならない玉条だ
よるこびは朗らかに^{こんしん}渾身に燃え
日輪は^{おほい}大なる^{さう}ひまはり草に祝福す
いのちは一切の^{せい}生にとゞまる
抹殺と添削との^{ひくわい}卑猥な人間の想像こそは痛ましけれ
そのアツピアランスの魂こそは痛ましけれ

われを嘆けば
あまくいたきアマリスの赤さ
直覚をすつるは
罪悪に値す

きりぎりす
すゐつちよう
啼くはわれのみかは
君ゆゑに
あひたさゆゑに
つくづくし

うらの森にしぐれふる
青いしぐれ——
散る^こ木の葉

P.40 ~ 41

<コメント>

高村光太郎のパートナー、高村智恵子作の「智恵子紙絵」は、美しく可愛い作品でみちあふれている。高村光太郎の詩集「智恵子抄」と合わせて読むことをお勧めしたい。

— 御参考 —

高村智恵子(たかむら・ちえこ)

(1886 — 1938)福島県に生まれる。福島高等女学校を経て日本女子大学家政学部を卒業。太平洋画会研究所に通う。「青鞥」の表紙絵を描く。高村光太郎と結婚。精神分裂症の徴候、自殺未遂、転地療養などの後、50歳のとき品川のゼームス坂病院に入院。51歳のころより紙絵を作りはじめ、その数は千数百点に及ぶ。53歳で没。

— 2016年9月8日(木) 林 明夫記 —